

『あの人が死んだ。結婚して間もない、本当に突然のことだった。夫に先立たれ、娘二人と一緒に貧しい生活をしていた時、私を助けてくれたあの人。身分など関係なく私を愛していると言ってくれたあの人。自分も奥さんに先立たれ、一人娘と一緒に暮らしていたから、だからあなたの抱える悲しみもわが身のように思えるといって私の手を取ってくれたあの人。身分違いを言い訳に結婚を拒んでいた私に心からの愛を与えてくれたあの人……死んでしまった、死んでしまった、あの人が死んでしまった……』

『あの人の葬儀が終わった。あつけないものだった。多くの人が葬儀に参加した。多くの人があの人の死を悼んでくれた。心無い人は私が財産目当ての結婚をしたと陰口を叩いた。中には私があの人を殺したなどという噂をたてた。それが気にならないほど、それを気にする余裕が無いほど、私は悲しかった。だが涙は出なかった。涙すら流さぬ私をみて悪評はますます口に挙がる。

代理人の方がその噂を払拭するよう対処してくれたが、そんなこと私にはどうでもよかった、ただあの人が死んだことが悲しかった。悲しすぎて涙すら流す余裕が無かった。本当に悲しいとき涙すら出ないのだろうか、そして私をのしる人は本当に悲しい目にあつたことが無いのだろうか。もしあるのなら、そしてそのせいで人格がゆがんでしまったのなら、私は彼らに同情しよう、私は本当に悲しいことがどれほどのものなのか身をもって知ったのだから』

『代理人の方が家財・財政の管理をしてくれていた。この人はあの人の古くからの友人で信頼のおける人だ。だから任せておいてもいいと思う。私にはいま何も考えられない。ただ嘆くだけ、あの人が死んだことをただ嘆くだけ。けれどわずかばかりでも時が過ぎたせいだろう、私はあの人の娘のことを思い出した。最近、あの子を見かけていない。あの人の葬儀で狂ったかのように泣きじゃくった子供がいたことは記憶にある。けれど気にも留めてなかった、それがあの人の娘であつたにもかかわらず。あの子はどうしたのだろうか？明日にあつて話してみようと思う』

『あの子はひどく弱っていた。私が訪ねたときあの子は重病人のようにベットに寝かされていた。あの子は食べるものも食わず、ひたすらに泣き続けていたそうだ。そして涙が枯れればかりに泣き続け、やがて衰弱し倒れたそうだ……あの人の葬儀の次の日に。

私たちに馴染んでくれず、あの人の影に隠れ、わがままに振舞っていたあの子の面影が今は無い。そこにあるのは魂の抜けやつれた人形のように静かなあの子、その顔をみて私の心に後悔と自分の愚かさを感じた。

この子が悲しんでいたこと、私はそのことに気付かなかった。いや気付こうとしなかった。ただあの人が死んだことが悲しくて、世界で一番悲しい思いをしているのは自分だけだと思いついで、目を背けていた。あの人の娘が私以上に悲しんでいることに。私はハツとした。何をしていただろう、私は何をしていただ、泣いて、悲しんで、周りから目を背けて！！』

『あの子を守らなければ、そう思った。あの子は何不自由なく育ってきたため自分で考えて何かをしようとしな。人任せにし、すぎり、わめくだけ。父親にだけ心を許し、私たちには愛情の欠片も感じられない、他人を見るかのような目で接していたあの子に娘達も気まずい思いをしていた・・・でもあの子はあの人の娘なのだ。私の愛したあの人が愛した実の娘なのだ。だから私もあの子を守ろう、あの子を守ろう。そしてあの子がこれから先、まっすぐに生きていけるように手助けをしよう。それが私に出来るあの人への恩返しなのだから。だから娘達にも協力してもらおう。義理とはいえ妹なのだ、きっと娘達も私の考えを理解してくれる、あの子を守る手助けをしてくれる』

『代理人と相談して、あの子がしっかりとした形で財産が相続できるように手続きをした。使用人も暇を出した。無駄な出費は避けよう、あの子に残せるだけ残そう。私にはいくらも必要ない。あの人が残したものは全て、将来あの子が生活するのに必要なものなのだ。だから私は要らない。私はただあの子を幸せにしたいと思う。娘達も納得してくれた。これから私はあの子のために努力しよう。あの子を一人前の女性に育てよう。私がいなくともしっかりと生きていけるようにあの子を育てることを、私はあの人に誓った』

『まず身の回りのことについて教えた。掃除の仕方、洗濯の仕方、料理の仕方・・・、あの子はまったく私の言うことを聞いてくれない。それをしようとしな。使用人を雇えばいいとわめく、何故私こんなことをしなくてはならないのかと泣き叫ぶ、父親の名前を出して私をなじる「お前は金目当てで父と結婚したのだ！！ だから私をこんなにながしろにするのだろうか！！ お前など地獄に落ちてしまえ！！」と。そのたびに私は同じ

ことを繰り返した。「これはお前のためなのだ！ 私はお前のためを思っただけでやるのだ」と』

『最近あの子は素直になり、大抵のことは自分で出来るようになった。しかしただ言われるままに家事をするようになり、まるで使用人のようなあり方だ。世間では私たち親子があの子をいじめている、奴隷のようにこき使って自分達は豪遊しているなどとあらぬ噂を立てられている。そんなことは無い。食事だってあの子がいた頃に食べていたような豪勢なものではなく、ここ数年はあの子と出会う前の貧しい生活だったときと同じようなものしか食べていない。着ているものだって上等なものじゃない。何度も縫い直して着ている。あの子のために残せるものは残そうと切り詰めているのだ。そんな余裕は無い。それなのに世間の噂は私の心を傷つける。けれどそれ以上にあの子が一人前の女性として育っている姿を見てうれしく思う。星になったあの子もきつと喜んでくれるはずだ』

『昨日のことだった。国王が息子の花嫁探しと称して舞踏会を開くと発表した。見初められればこれ以上の幸せは無いと国中の娘はそれに心躍らされている。もちろんあの子もそのようだ。この知らせを聞いてからなんとなく落ち着かないでいる。だが私は知っている。あの息子と放蕩ぶりを。彼はひどく女癖が悪いのだ。そして貴族や富豪の娘に手を出し、更には他国の女性にちよっかいを出していた。そのため彼は誰にも相手にされず、このままでは後継者にも困った国王が仕方なく民衆から花嫁を選ぼうとしているのだ。貴族間では有名な馬鹿王子ぶりも父親の根回しか民衆にはあまり噂になっていない。むしろ王子が民衆から花嫁を選んでも許すという国王の行為に身分の隔たりを感じさせない懐の深さを勘違いした民衆によって彼はひどく良い王子であるかのように思われている。』

いけない、あの子をこの王子に合わせてはいけない。おそらく王子はあの子を気に入るだろう。器量もいし財産も持っている。性格も従順だ。何より王子の好評というゆがんだ噂を丸呑みにしてしまっているのだ。王子にとって十分に都合がいい存在だろう。もし王子に気に入られ、あの子が王子と結婚してしまったら、あの子は一生あの愚かな男に振り回されることになるだろう。あの子があの子と結婚して大人しくなるとは思えない、むしろあの子は弄ばれることになるだろう。それはあまりにもひどすぎる。娘達と本当の王子の姿についてあの子に聞かせているが、一向に耳を貸そうとしない。むしろそんなことを言う私たちに対して不快感をあらわにしているようだ。絶対に舞踏会にあの子を出さ

せるわけにはいかない』

『私は悪夢でも見たのだろうか？ 今夜王子と踊っていたあの女性は間違はなくあの子だ。どんなにきれいな衣装を身にまとっていても、どんなに美しい宝石に彩られたとしても、私があの子を見間違うはずが無い。私が何度そのことを問い詰めても「知らない」の一点張りで部屋に籠ってしまった。だが間違いなくあの子は舞踏会に参加し、王子と踊り、気に入られてしまったのだ。これはひどくあぶない。

そもそもどうやってあの子はあの衣装に身を包み、舞踏会に参加したのだろうか？ 家にはあのようなドレスはないし、宝石もすでに全て整理してあの子のために財産として取ってある。それなのにあの子は一体どこからあれらを調達してきたのだろうか？ 念のため代理人にも確認したがあの子が金銭の催促に來た覚えはなく、宝石類もドレスも貸してはいないときっぱり否定した。そもそもあの子は代理人のことを知らないはずだし、知っなくてもどこに住んでいるかなど、詳しいことまでは調べようが無いはずだ。娘達にも確認したが言った覚えは無いという。

ともかく、私はあの子を王子から守らなければならない』

『舞踏会の夜に王子と踊った女性を探していると言う知らせが町のあちこちに届けられた。若い娘達は我こそはと率先して自分がそうであると名乗りを上げた。あの子は名乗りを上げていない。しかし時折何かを考えているように表情を変化させる。特に笑顔が私は嫌いだ。周りから見ればよい笑顔に見えるだろう。だが私から見ればそれはあたかも嘲笑っているかのような顔にしか見えないのだ。娘達も気味悪がっている。そうこうしているうちに今日は隣町まで城の使いが來たそうだ。なんでも女性は何かを落とすとしていったらしく、それが女性を探す手がかりであるらしい。しかしいまだ女性は見つかっていない。

どうかあの子ではない条件にあう女性が別に現れてくれることを期待する。そしてその女性を見た王子がその舞踏会の夜に感じた印象との差に落胆し「自分の思い違だった」と搜索を打ち切ってくれることを期待する。

『最悪の事態が起きてしまった。あの子があの子の夜の舞踏会で現れた女性であると正式に認められてしまったのだ。何度も止める私たちの言葉を無視し、あの子は城に行ってしまった。これからどうなるのだろうか、あの子は幸せになれるのだろうか、とめどなく流れ

る悩みをとめることができない。私はどうしたらよいのだろう』

『……………どうして……………こんなことになったの……………だろう。私は……………あの子を……………愛していたのに……………幸せを願って……………いたのに……………もう……………何も……………見れない……………あの子の顔を私は……………見れない』

何年にも渡って書かれたと思われる日記を読み終えて、私は一息つくために部屋から出た。部屋に入る前は確かに廊下の窓からは朝日が差し込んでいたはずだが、いつの間にかそれは露と消え、空には半分にかけて月が割れた半身を憂うかのように頼りなく光っている。私はこの日記を返すため家主の部屋へと足を向けた。

三度のノックのあと寝ぼけた声で、入室を許可する返事を聞いた私は部屋に入り、椅子に腰掛けたまま寝ぼけた表情で私を見つめる彼女に日記を見せて問うた。

「この日記はどうしたんだい？ 間違いなく君の日記ではないようだけど」

初め、寝ぼけた表情で日記に目を向けていた彼女の顔は次第に目が覚めたのか

「ああ、それ？ それはこの間とある娘さんと契約したときに貰ったもののひとつさ。

なかなか面白かっただろう？」

と返事した。

「面白かった？ 私には苦労が書き綴った日記としか読み取れなかったんだが？」

「まあ日記だけ読んだらそうかもね♪ でも背景を知っているとそこに含まれた滑稽さがそこからうかがえるのさ」

「どういう背景があるんだ？」

「そうだね、まず読んでみてどう思った？ それを聞かせてくれないかな？」

「ふむ……………少なくともこの日記の書き手が“あの子”とやらを非常に大切に思っていることは伝わってくるな。ただ最後の文章が良く分からない。なぜこんなに汚い文字で、しかも飛び飛びでいい加減な書き方がされているんだ？ それに“見れない”とは？」

疑問を伝えたところ彼女はしたり顔で私を見つめた。

「それは簡単。彼女が目や鼻に挟りだされてしまったからさ。まあそれは私の契約の所為なんだけどね」

「どういうことだ？」

「事の顛末を語れば私に契約を持ちかけたのはこの日記に出てくる“あの子”なのさ。彼女は私に二つのことを願った。一つは豪華絢爛な衣装で舞踏会に行くこと、もう一つは義母や義姉達への報復をね」

「ちよつと待て、舞踏会に行きたいと願うのは理解できる。だがなぜ義母や義姉達に報復しなければならぬんだ？ 彼女達はこの子を大事にしていたんだろう？ それともこの日記はその義母の日記ではないのか？」

彼女の言葉を理解できなかった私は矢継ぎに質問を重ねた。

「そんなに一気に答えられないって。とりあえずその日記の作者は義母で、書いてある内容は間違いなく事実だよ。彼女たちはその子を大事に思っていたこともね」

「じゃあ何故彼女はそんな契約をしたんだ？」

「しいていうならこの子が世間知らずのお嬢様だったからかな」

「訳がわからないんだが？」

「彼女はいいところのお嬢様だ。しかも母親がいない分父親にずいぶん甘やかされて育った、当然自分で家事なんてやったことは無かつただろうし、やろうとも思わなかつただろうね」

「それについては確かに記述があるが、最終的に彼女は家事が充分にこなせるようになったんだろう？ 何の問題もないじゃないか」

「ふふふ、それが問題なのさ」

彼女はそういつて笑った。

「それが問題？」

「考えてもみなよ、今まで使用人がやっていたことを自分がやらされるんだよ、しかも父親に取り入った義母に命令されて。わかる？ これは多分、いや間違いなく屈辱的なことなのさ。義母からしてみればそうやってそつなく家事をこなせるのが一人前の女性だと思っっている。ところがどっこい彼女から見ればむしろいじめにしか思えないのさ。彼女はささいなことすら難癖つけてネズミに話しかける振りして近所の耳に入るように愚痴っていたのさ。近所の人間だって、再婚相手に先立たれた義母よりも、義母にいびられる薄幸の少女に味方するだろうし」

一瞬、彼女の言っている意味が理解できなかった。だが次第に理解できるようになると、この日記を滑稽だといった意味がようやくよく見えてきた。

「じゃあ、彼女が契約したのは・・・」

「思ってる通りだよ。義母はこの子をいじめてなんていない。むしろ何にも知らないわがまま娘に一から家事を仕込んだんだ。ものすごく手間のかかったことだと思うよ。そしてその手間がかかった分、この子は恨みを心底に溜めていくわけさ。そして王子の話題が出てそれが爆発してしまった。無理だとわかっているも王子に見初められるという願いも否定されたんだ。幸せも願ってはいけなかった。彼女が思っただろうね。私は昔彼女の祖父とも契約したことがあってね、偶然父親の書齋を掃除していた際に見つけた私との連絡方法を使って契約を結んだのさ。代償として義母が奪ったとされる父親の財産を提示してね」

「なるほど・・・ちよつと待て、その契約おかしくないか？ だって財産は奪われて無いだろう」

私は矛盾点を指摘した。

「その通り。代理人もいたし正式に彼女の財産として登録もされてからね。だから私は家に残っていた家財を貰うことにした。あれなら彼女の財産じゃないからね。その中にあったのがその日記だよ」

そう言って、一気に話し終えて疲れたのか、彼女はコップに水を汲んで口にした。人心地ついて彼女の口から吐き出された息が部屋の静けさに輪をかける。

「哀れな話だな。娘の幸せを思ったことが、逆に恨みを買うなんて」

私はこの義母たちに同情せざるを得なかった。

「まあ娘は娘で今泥沼だけだね。王子は浮気するは、代理人が真実を語って義母の潔白を訴えたりで、せっかく結婚できたのに国民から人気は最悪なんだとき。まあ私みたいな魔女にとつて見れば国が荒れればその分阿呆な輩が増えて稼ぎ時なんだけだね。」

そう言って悲劇を滑稽と笑った魔女は話を締めくくった。

「そういえば日記にも名前が出てなかったので気になったんだが、その娘さんの名前はなんていうんだ？」

魔女は答える。

「シンデレラって言ったかな」